

県感染症情報センター

古くて新しい病気 結核

声なき感染症を知る ◆16◆

タレントのビートたけし(北野武)さんが、「他人ごととは思えないね。結核は現代の病気だ」と、テレビ画面いっぱいに強烈なフレーズと共に登場していた、平成21年の公共広告機構のコマーシャルは、私にとって記憶に新しいところです。今回は、「昔の病気」というイメージが強い結核の現状についてお話しします。

▽背景と現状
第2次世界大戦の終戦直後の昭和25(1950)

しく減少してきました。しかし、結核はいまだ年間2万人以上の患者が新たに発生しており、主要な感染症の一つです。患者の発生を、かかりやすさを現す「罹患率」と言う指標で世界と比べると、わが国の罹患率は16・1(平成25年)で、欧米先進国(イタリヤ2・7、米国3・4、カナダ4・0など)の多くが10以下なので、まだまだ高い状況にあると言えるのです。

えられています。一つは、患者に60歳以上の高齢者が目立つと言う事実があり、結核の蔓延(まんえん)していた時代を過ごした人たちが、これまでは自身の免疫で封じ込めていたものが、年を取ったことや病気を引き金として免疫力が落ちてしまい、発病するようになるケース。もう一つは、結核に対する関心が失われ、重症になるまで気付かないケースなどが、なかなか制御できない要因と考えられています。

高年齢者の発病注意
初期症状に関心を

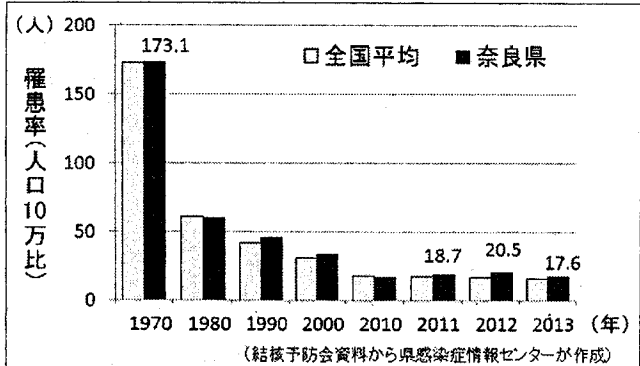
年ころは、死亡順位の第1位が結核でした。「不治の病」として恐れられた結核も、国を挙げた予防や治療の取り組みで著

と、同年の新たな患者は244人で、罹患率は17・6人。これは全国平均より高く、患者の多い都道府県の仲間に入っているのです。

散り、これを吸い込むことで感染が起こります。しかし、感染しても必ず発病するとは限らず、多くは発病せずに済み、おおよそ1割程が発病すると言われています。

罹患率とは、一定期間内に新たに発生した患者の、単位人口10万に対する割合のことです。

▽免疫力の低下
なぜ、結核患者がスムーズに減少しないのでしょうか。理由は大きく二つが考



結核の罹患率

(結核予防会資料から県感染症情報センターが作成)